ISSN 0289 − 4130

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 —関東・中部地方の事例研究— 尾田　識好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷　渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川　莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦　誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美 柴田　徹 西井　幸雄 麻生　敏隆 坂下　貴則 小茂田　幹 大屋　道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田　琴子 上野真由美 赤熊　浩一 小林まさ代 大屋　道則

関東地方における周溝持建物の系譜 福田　聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 —無袖石室と片袖石室を対象に— 青木　弘

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ 山本　良太

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 —埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に— 渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造 —平城京遷都後の官寺を中心に— 香川　将慶

2016

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

序

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 …… 尾田　識好　（1）
　―関東・中部地方の事例研究―

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 …… 古谷　　渉　（19）

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 …… 中川　莉沙　（37）

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について …… 松浦　　誠　（57）

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 …… 上野真由美
柴田　　徹
西井　幸雄
麻生　敏隆
坂下　貴則
小茂田　幹
大屋　道則　（69）

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 …… 山田　琴子
上野真由美
赤熊　浩一
小林まさ代
大屋　道則　（79）

関東地方における周溝持建物の系譜 …… 福田　　聖　（87）

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 …… 青木　　弘（107）
　―無袖石室と片袖石室を対象に―

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ …… 山本　良太（135）

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について …… 長谷川啓子（149）

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 …… 渡邊理伊知（163）
　―埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に―

古代寺院における食堂院の構造 …… 香川　将慶（181）
　―平城京遷都後の官寺を中心に―

関東地方における周溝持建物の系譜

福田　聖

要旨　関東地方における周溝持建物の系譜については、これまで平面形態をもとに検討が行われてきた。建物形式が竪穴建物の場合と平地式建物の場合では、大きく周溝の平面形、広狭、連続性と合わせて、あまり問題にされてこなかったが、開口部のあり方が大きく異なっている。関東地方と関係が深いと予想される弥生時代終末から古墳時代前期の北陸、東海東部の例についても、周溝の平面形、広狭、連続性と合わせて開口部の形態や開口度合いについて検討を行った。その結果、関東地方の周溝持竪穴建物については北陸地方、平地式建物、施設のない周溝については東海東部との系譜関係が明らかになった。また、東海東部、関東の開口度合が広い周溝持建物の開口部については、豊島馬場遺跡の例から前室の存在が推定され、農具や容器が収納されていた可能性がある。周溝持平地建物には、通常の竪穴建物的な伏屋式建物、壁立式建物、掘立柱建物に前室が付く場合があるとすれば、更に展開は複雑になる。この複雑さこそ関東地方の特徴と考えられる。

はじめに

筆者はこれまでのいくつかの拙稿において、関東地方における周溝持建物の様相についてとりまとめ、古墳時代前期にこの種の建物が造られる社会的意義について検討してきた（福田 2014 ほか）。

その中で、群馬県域では竪穴建物が明瞭に認められ、埼玉・東京両県域では平地建物が中心であると指摘した。同様の指摘は、石守晃（石守 2003）などによってなされており、系譜関係についても諸氏による所見がある。その多くは平面形の比較によっており、概ね首肯できるが、一方で未だ検討が充分でないと考えられる課題も多い。

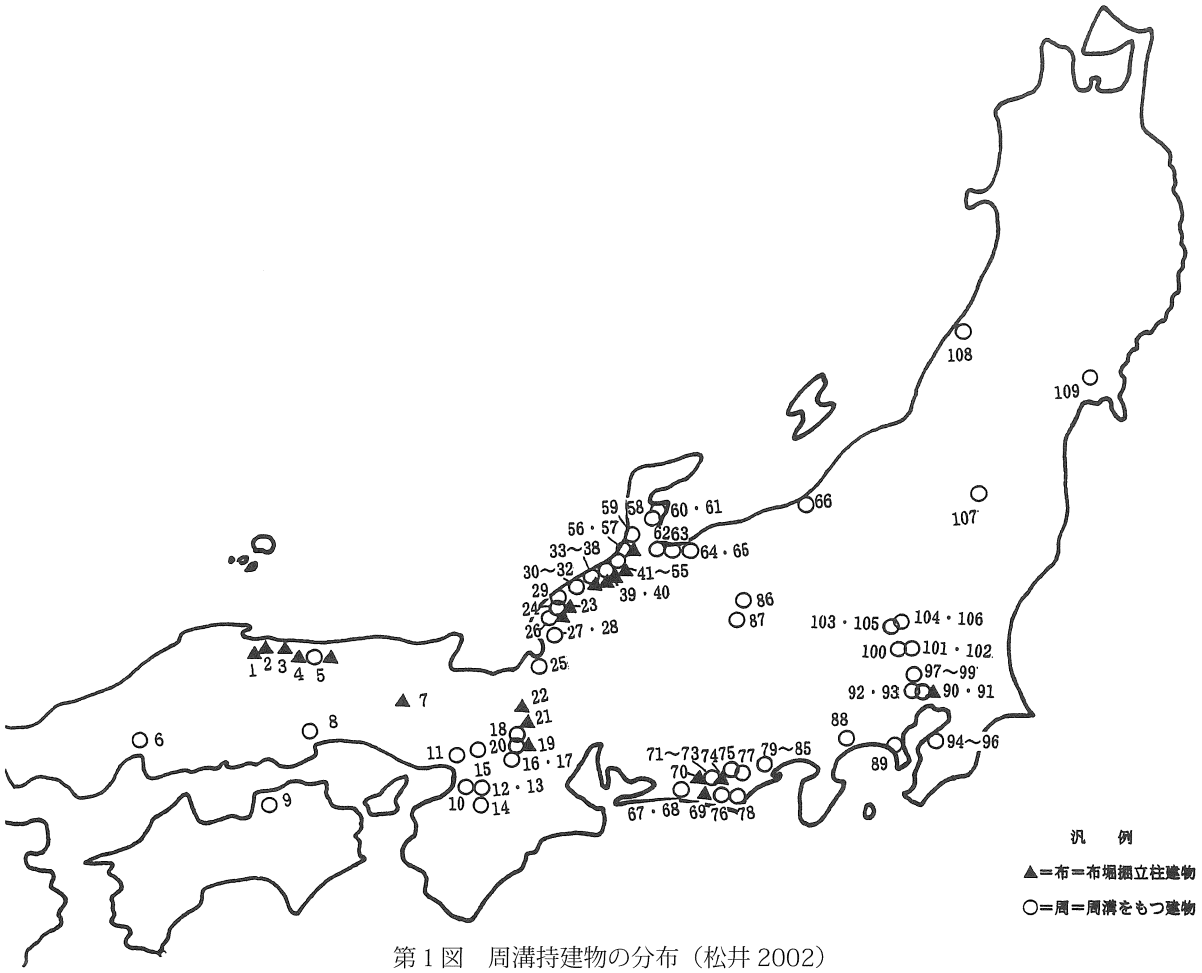
本稿では、その問題の一つとして開口部を取り上げ、それを含めて周溝持建物の系譜関係について検討する。

1．周溝持建物の平面形と系譜に関する研究略史

第 1 図は松井一明が示した周溝持建物跡と布堀建物跡の分布図である。この分布からは関東地方でこの建物形式が採用される系統として北陸→長野→群馬、静岡→神奈川・東京→埼玉・千葉という 2 つの系統が容易に想像され、それが周溝内の建物形式の差異と対応関係にある予想が立つ。

周溝持建物の系譜関係については多くの研究者による所見があるが、具体的な作業によって系譜関係について述べているのは、岡本淳一郎（岡本 2006）や石守晃（石守 2003）である。その研究の概要については別に述べたため割愛する（福田 2009）が、本稿の検討に当たって、以下の指摘を改めて掲出しておきたい。

石守は群馬県域における 29 例を検討し、それらに北陸地方で多く見られる「囲繞型」、南関東地方に多く見られる「開口型」、東海地方に多く見られる「馬蹄型」の各形態が見られ、各々の地域から導入されたとしている。また、周溝を設ける理由についても、立地や同一地点で周溝のない建物が造られていることから、防水・除湿のみではなく、低地部の「建築施工法の一つとして認識



第１図　周溝持建物の分布（松井 2002）

されていて、建物建設に当って東海・北陸・南関東の各地域から伝えられた設計法あるいは工法を実際に施工してみたもの」（P325l20 ～ 25）と述べている。

岡本には多くの研究があるが、中でも最も新しい『下老子笹川遺跡発掘調査報告』（岡本ほか 2006）では、平面分類と周溝半径の検討から、系譜関係について「東北や関東、東海の一部（岐阜県など）は北陸からの系譜と考えられる。このうち関東は、弥生後期に広溝式の周溝をもつ建物が出現するが、独自の型式変化を経て、古墳期になって積極的に採用し、盛行した」（P267l24 ～ 26）と述べている。関東地方の周溝持建物はもともと北陸→東海東部・関東という一連の流れによって導入され、具体的には千葉県富津市高砂遺跡などで後期前半に導入された後、古墳前期に独自の型式論的変化を遂げ、展開したとされている。

両氏の検討は平面形態によるもので、筆者も大局的には両氏のいう系譜関係は正しいと考えるが、一方で若干の違和感がある。それは、第２～４図に掲出したように、周溝持竪穴建物と周溝持平地建物・掘立柱建物は、明らかに周溝の形態が異なるからである。この差異については前稿（福田 2013）で立地、建物の規模、系譜関係のいずれか、もしくは複数の要因によると考えた。それぞれの建物で周溝の形態が決定する要因が異なると考えられるため、要因が複数であるというのは至極当然である。

しかし、一方で全体の平面形のみでなく、開口部の形態、開き方が大きく異なるのは、一見して誰しも首肯されるところであろう。

前稿では特に周溝持竪穴建物で前橋台地を中心

とする地域では開口部が狭く、荒川低地を中心とする地域では開口部が広いという相違を示したが、それ以上の検討を行わなかった。だが、この開口部の広狭は、入口部の構造の違いを示す可能性があり、看過できない問題と考えられる。

本稿では、系譜関係と建物構造の差異について、この開口部の差異とその他の要素との対応関係をもとに検討を始めることにしたい。

2．周溝持建物跡の様相

（1）周溝持建物跡の周溝と開口部の様相

第２～13図には関東地方の周溝持竪穴建物跡、施設が検出されていない周溝持平地建物跡・掘立柱建物跡、東海地方東部、北陸地方の周溝持建物跡と、それぞれの周溝区画内側上端、開口部上端間の距離の関係を示した。以下では、各々の周溝の平面形、周溝の広狭、開口部について、前稿と重なる部分も多いが概観したい（註１）。

周溝持竪穴建物跡　関東地方（第２図）

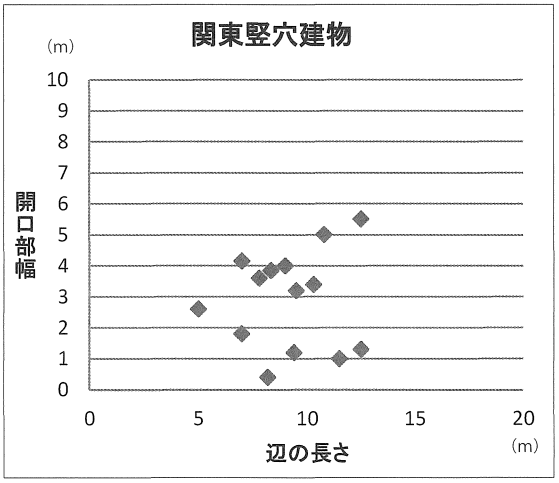
平面形　周溝の平面形については、鍛冶谷・新田口５、志茂SH04、上之手八王子102号、三和工業団地12、横手油田Ｂ１、横手早稲田Ⅱ１、横手早稲田Ⅲ１の７基、約３割の遺構に円形の周溝（Ⅲ類）が巡り、その他のものも周溝が丸みを帯びており、前稿で指摘したように円形基調の志向が窺える。

加えて、周溝が不整形である点が注意される。掘削した周溝を整える意識が希薄である現われであり、周溝が実利面、実用施設としての側面が重視されていたためと考えられる。

周溝の広狭　周溝の広狭について、前稿では周溝が広い例が多いと指摘したが、実際には「狭溝」タイプの例も多い。広溝タイプは大久保領家片町35号、上之手八王子149号、上之手八王子116号、横手湯田Ｂ１・Ｂ２・Ｂ４、横手早稲田Ⅱ１・Ⅱ６、中内村前703・707の10例である。狭溝タイプのものは、鍛冶谷・新田口５・14・16号、志茂SH04、上之手八王子102・176、上之手石塚59、三和工業団地12、唐桶田１の８例である。24例中８例、全体の３割に上る。八王子149などは両方のタイプが見られると言っていいだろう。周溝持竪穴建物の周溝は幅広、幅狭の両方のタイプが見られるのである。

第１表　関東地方の周溝持竪穴建物跡

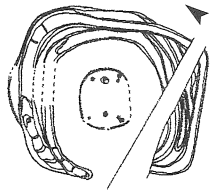
遺跡名	遺構	平面形	開口部数	区画内	開口部	開口度	ランク
鍛冶谷・新田口	5	Ⅱ	1か	7	4.15	59.2	B
	16	Ⅰ	2	8.35	3.85	46.1	C
	14	Ⅰ	1か	7.8	3.6	46.1	C
大久保領家片町	35		1－中央	9	4	44.4	B
志茂	4		1－中央	5	2.6	52	C
上之手八王子	102	Ⅲ	1か	13.5			A
	116	Ⅰ	1辺開口	12.6		100	A
	149	Ⅰ	全周か	15.6			A
	176	Ⅰ	1－中央	10.3	3.4	33	A
上之手石塚	59		3か	11			
三和工業団地	12		1	10.8	5	46.2	
横手湯田	Ａ１	Ⅱ	1－中央	8.2	0.4	4.8	C
	Ｂ１	Ⅰ	1	9.4	1.2	12.7	B
	Ｂ２	Ⅰ	1辺開口	8.4			B
	Ｂ４	Ⅰ	1－中央	12.5	5.5	44	A
横手早稲田	Ⅱ１	Ⅱ	全周か	6			A
	Ⅲ１	Ⅰ	1－中央	7	1.8	25.7	C
	Ⅲ２	Ⅰ					－
	Ⅲ３	-					－
	Ⅲ４	Ⅰ	1－中央か	9.5	3.2	33.6	B
	Ⅲ６	-					C
中内村前	703	Ⅰ	1－中央か	12.5	1.3		A
	707	Ⅰ	全周	9.5			B
唐桶田	1		1	11.5	1	8.6	



第２図　関東地方竪穴建物の開口度合

開口部　前稿では一辺中央開口型（①）が基本だが、それに加えて隅が切れる②型や全周型（⑤）が見られるとした。本稿で問題とする開口度合については、埼玉県域の鍛冶谷・新田口の３例、東京都域の志茂SH04、群馬県域の三和工業団地12号、横手湯田Ｂ４が開口度40％後半を越え

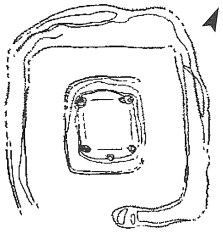
古墳時代初頭

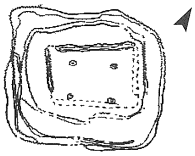

大久保領家片町 35

鍛冶谷 14 号

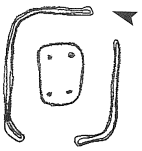
志茂 SH04

古墳時代前期前葉


中内村前 703

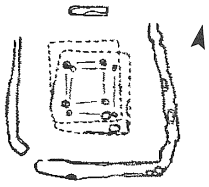

中内村前 707

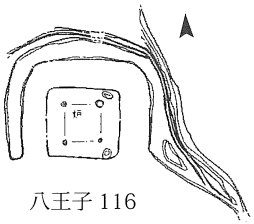
早稲田Ⅱ1


鍛冶谷 16 号

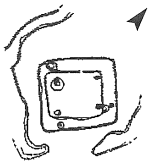
鍛冶谷 5 号

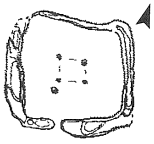
古墳時代前期中葉

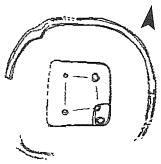

唐桶田 2・4 H 3 堀

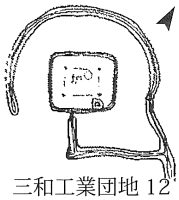


八王子 116


早稲田Ⅲ4


横手湯田 A 1


八王子 102

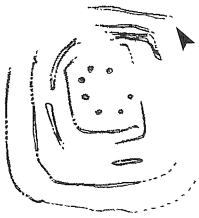


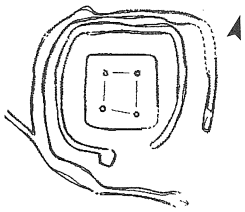
三和工業団地 12

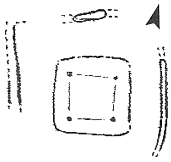
早稲田Ⅲ1

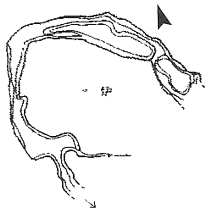
早稲田Ⅲ3

古墳時代前期後葉

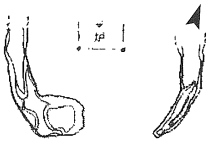

八王子 149


八王子 176

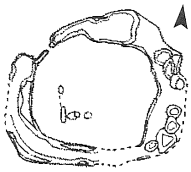

上之手石塚 59

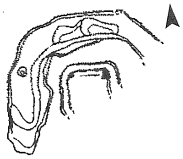


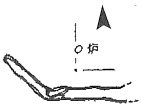
横手湯田 B 2



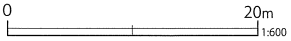
横手湯田 B 4


横手湯田 B 1

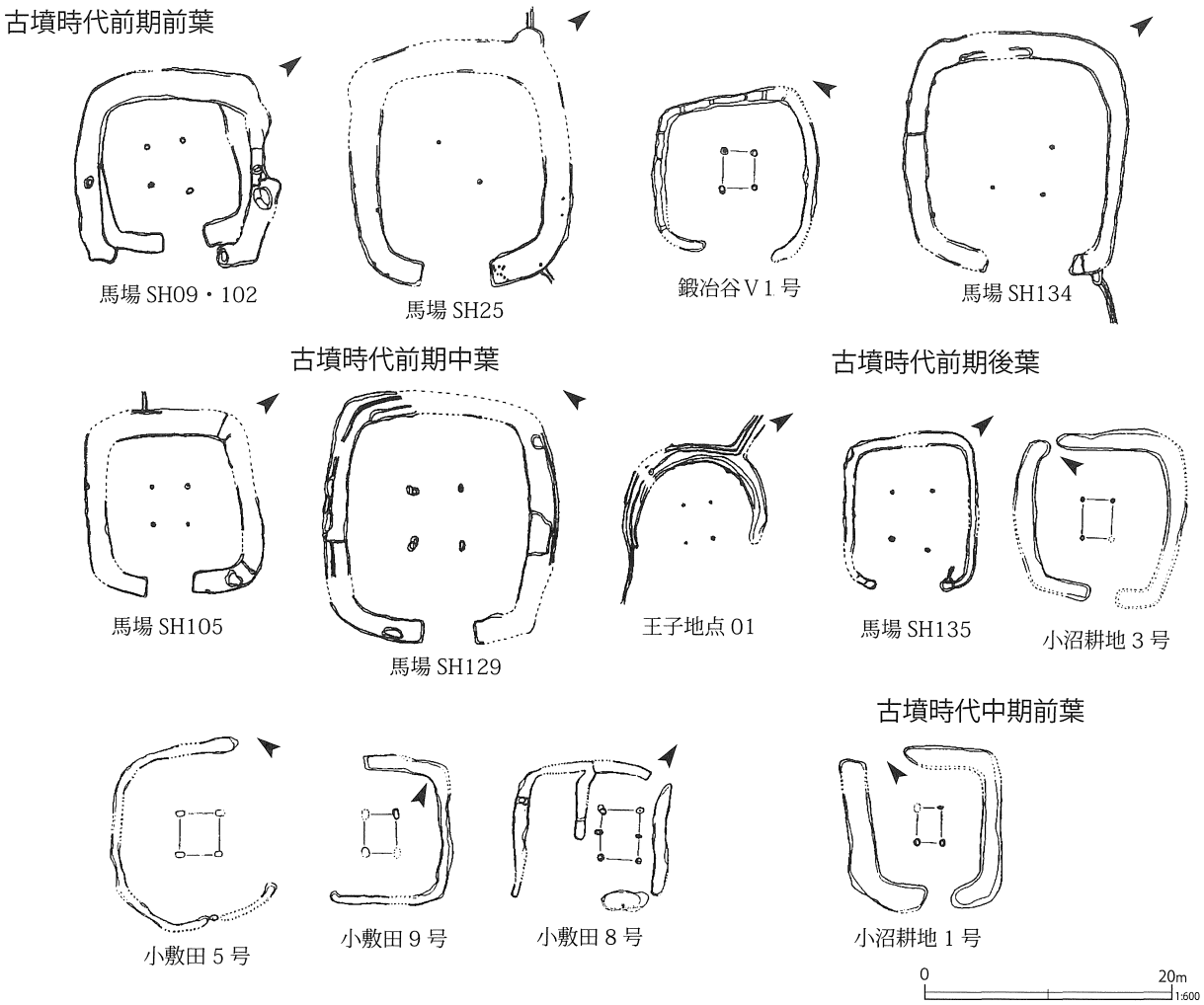

早稲田Ⅲ6



早稲田Ⅲ2



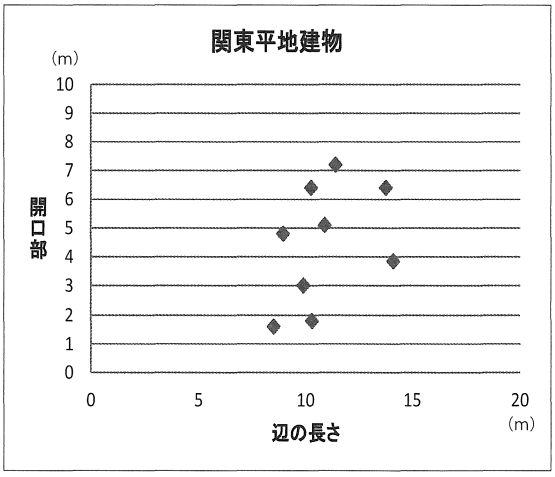
第 3 図　関東地方の周溝持竪穴建物跡



第４図　関東地方の周溝持平地建物跡

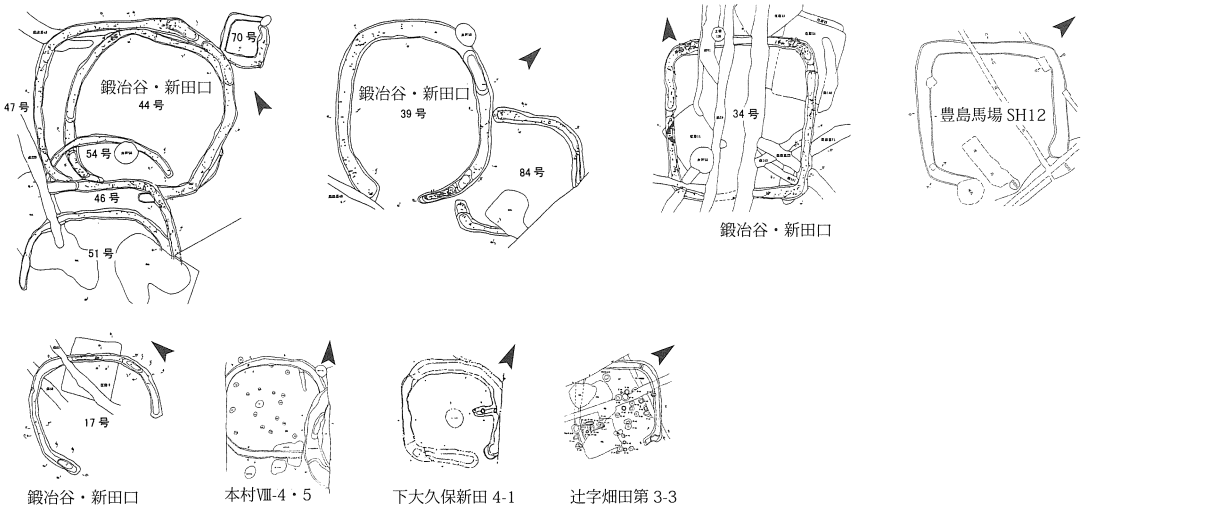
第２表　関東地方の周溝持平地建物跡

遺跡名	遺構	平面形	開口部数	区画内	開口部	開口度	ランク
豊島馬場	9	Ⅰ	１－中央	9.9	3	30.3	B
豊島馬場	102	Ⅰ	１－中央	11.4	7.2	63.1	B
豊島馬場	25	Ⅰ	１－中央	2			A
豊島馬場	105	Ⅱ	１－中央	1			C
豊島馬場	129	Ⅰ	１－中央	14.1	3.85	27.3	A
豊島馬場	134	Ⅰ	１－中央	13.75	6.4	46.5	A
豊島馬場	135	Ⅰ	１－中央	8.95	4.8	53.6	B
豊島馬場	王子 01		１辺開口			100	B
鍛冶谷・新田口	Ｖ－１	Ⅰ	１－中央	10.9	5.1		B
小沼耕地	1	Ⅰ	2	8.5	1.6	18.8	B
小沼耕地	3	Ⅰ	2	10.3	1.8	17.4	B
小敷田	5	Ⅰ	１辺開口	13.1		100	A
小敷田	8	Ⅰ	１辺開口	9.9		100	B
小敷田	9	Ⅱ	3	10.25	6.4	62.4	B

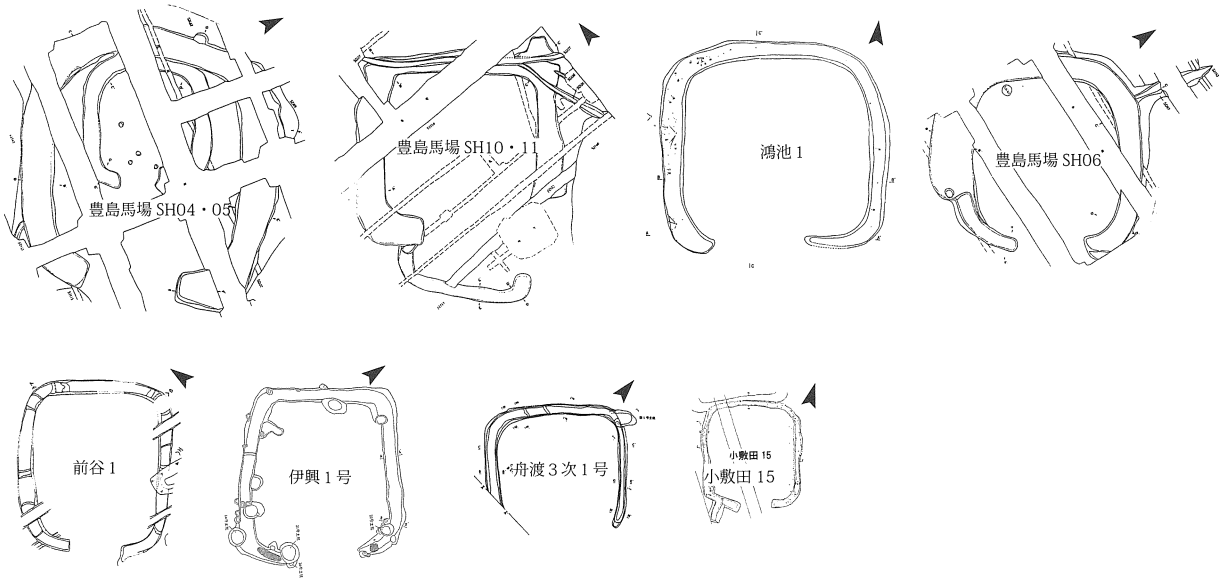


第５図　関東地方平地建物の開口度合

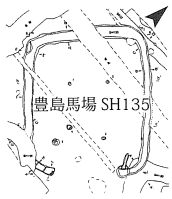
古墳時代初頭



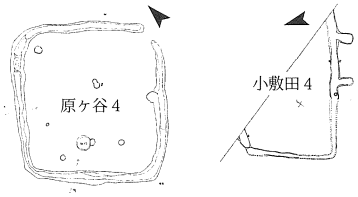
古墳時代前期前葉



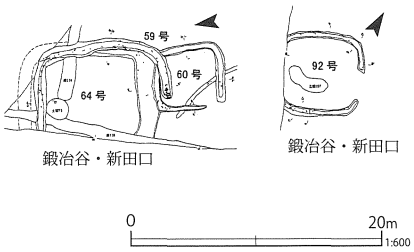
古墳時代前期中葉



古墳時代前期後葉



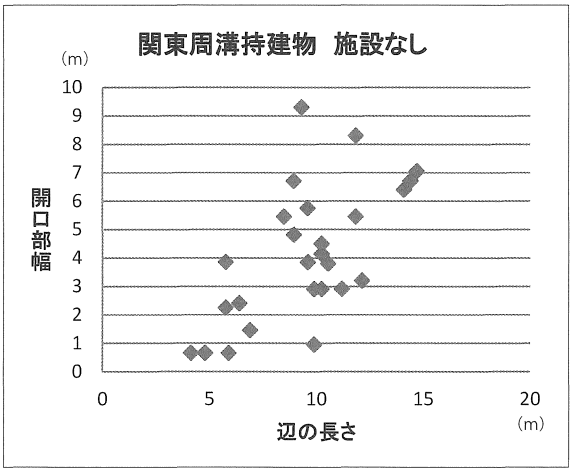
不明



第６図　関東地方の周溝持建物跡（施設なし）

第３表　関東地方の周溝持建物跡（施設なし）

遺跡名	遺構	平面形	開口部数	区画内	開口部	開口度	ランク
鴻池	1	Ⅰ	１－中央	14.7	7.05	47.9	A
豊島馬場	SH03	Ⅰ	１－中央	12.15	3.2	26.3	A
豊島馬場	SH04	Ⅰ	１－中央	14.4	6.7	46.5	A
豊島馬場	SH06	Ⅰ	１－中央	11.85	5.45	45.9	A
豊島馬場	SH10	Ⅰ	１－中央	11.85	8.3	70	A
豊島馬場	SH134	Ⅰ	１－中央	14.1	6.4	45.3	A
鍛冶谷・新田口	1	Ⅰ	１－中央	10.25	4.15		B
鍛冶谷・新田口	27	Ⅰ	１－中央	10.55	3.8		B
鍛冶谷・新田口	32	Ⅱ	2	8.5	5.45		B
鍛冶谷・新田口	34	Ⅱ	１－中央	10.25	2.9		B
鍛冶谷・新田口	39	Ⅳ	１－中央	9.9	2.9		A
鍛冶谷・新田口	44	Ⅰ	１－中央	11.2	2.9	25.8	B
前谷	1	Ⅰ	１－中央	9.6	3.85		A
伊興	1	Ⅰ	１－中央	10.25	4.5		B
原ケ谷戸	4	Ⅰ	１－隅	9.9	0.95		B
豊島馬場	SH12	Ⅰ	１－隅	9.6	5.75	60	B
豊島馬場	SH135	Ⅰ	１－中央	8.95	4.8	51.5	B
舟渡	3次1号	Ⅰ	１辺開口	9.3	9.3	100	A
鍛冶谷・新田口	17号	Ⅲ	１－中央	8.95	6.7	75	B
本村	Ⅷ－4・5	Ⅰ	全周	6.7			C
小敷田	4	Ⅱ					C
小敷田	15	Ⅰ	１－中央	6.4	2.4	37.5	C
下大久保新田	4-5	Ⅰ	１－隅	5.9	0.65	10.8	C
	4-7	Ⅰ	１－中央	6.9	1.45	20.9	C
豊島馬場	SH133	Ⅰ	１辺開口	5.75		100	C
辻字畑田第３	3	Ⅰ	１－中央	5.75	3.85	60.6	C
鍛冶谷・新田口	6	Ⅰ	１－隅	4.8	0.65	11.3	C
鍛冶谷・新田口	60	Ⅱ	１－隅	4.15	0.65	17	D
鍛冶谷・新田口	92	Ⅰ	１－中央	5.75	2.25	30.8	D



第７図　関東地方周溝持建物跡の開口度合（施設なし）

ており、相当大きく開口している。一方上之手八王子176、横手湯田Ａ１・Ｂ１、横手早稲田Ⅲ１・Ⅲ４、唐桶田１は35％以下で開口部が狭い。グラフでも開口度合の下方に分布し、相対的に狭い例が多いのが分かる。

周溝持掘立柱建物　関東（第３図）

第３図には関東地方の周溝持掘立柱建物跡を掲出した。

平面形　周溝の平面形は王子地点01が円形である他は、いずれも隅丸方形である。

竪穴建物の例と対照的に、周溝は直線的で整えられている。

周溝の広狭　前稿で指摘したように幅１ｍを超えるものがほとんどである。

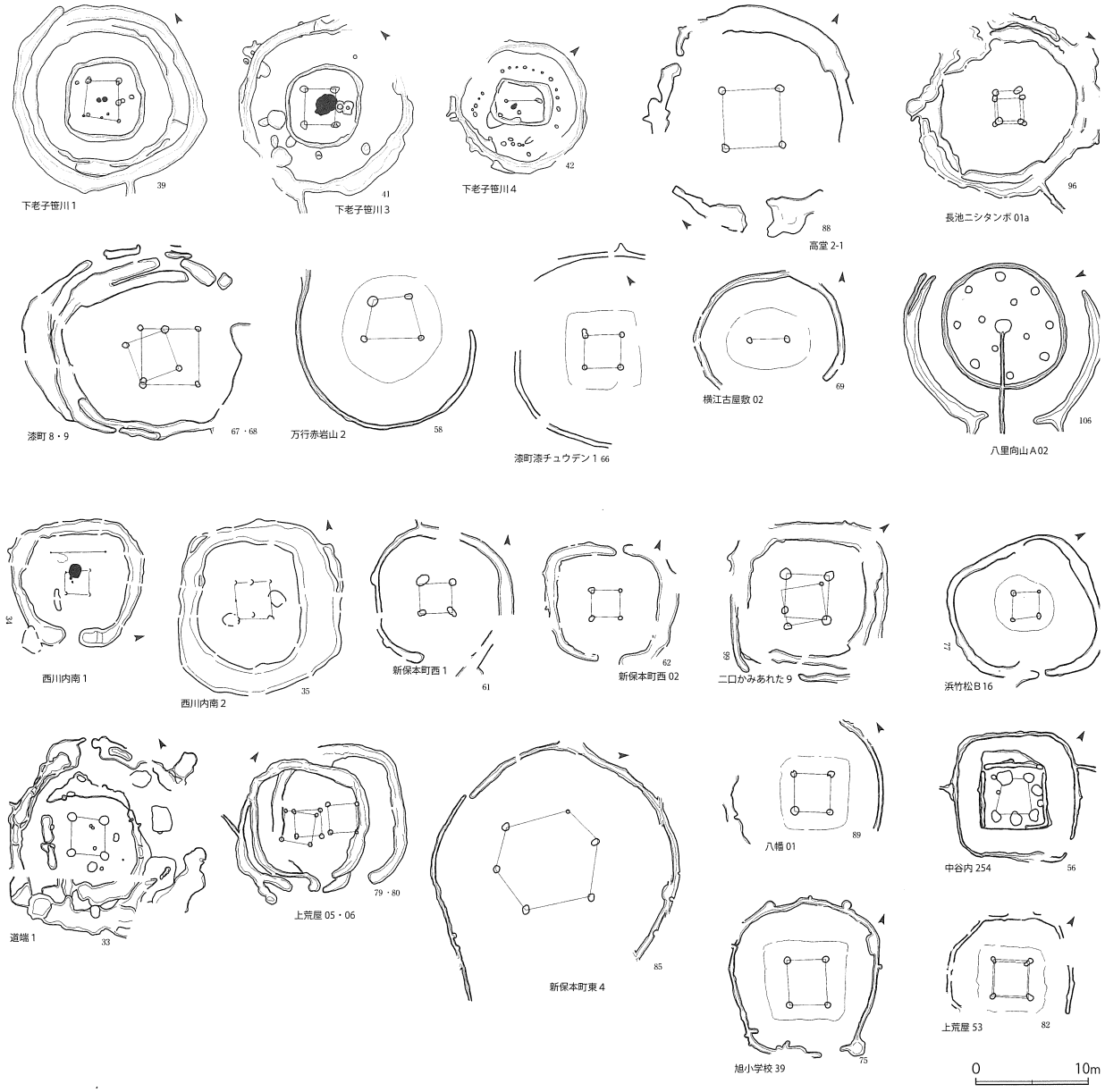
開口部　一辺中央開口型（①）が基本だが、それに加えて隅が切れる②型が見られる。本稿で問題とする開口度合については、埼玉県域の小沼耕地１・３号の１例、東京都域の豊島馬場SH09・25・105・129の４例が、開口度が30％前半未満で、開口部が狭いが、それを除いた例は40％後半から一辺開口までで、相当大きく開口している。

周溝持建物跡　施設なし　関東（第４図）

第４図には区画内に建物が検出されていない周溝持建物跡を、規模ごとに掲出した。Ａランクは12.0ｍ以上、Ｂランクは9.0～12.0ｍ未満、Ｃランクは6.0～9.0ｍ未満、Ｄランクは6.0ｍ未満である。

平面形　周溝の平面形は鍛冶谷・新田口17号のように円形（Ⅲ）に近い例もあるが、大部分は隅丸方形（Ⅰ）である。次いで方形（Ⅱ）が多い。周溝はやや不整な例も見られるが、大部分は直線的で整えられている。

周溝の広狭　周溝の広狭については、Ａランクは広い例が多く、Ｂランク以下は広狭の両者が認められる。規模が小さくなるに連れ、周溝幅、深度ともに小さくなっている。

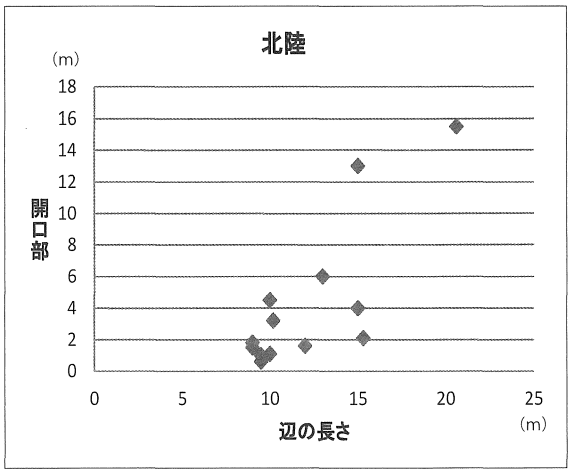


第８図　北陸地方の周溝持建物跡（岡本 2006 から改図転載）

開口部については一辺中央開口型（①）が基本だが、それに加えて隅が切れる②型、三辺のみの③型が少数見られる。開口度合については、豊島馬場 SH04、鍛冶谷・新田口６・34・39・44、原ケ谷戸４号、小敷田 15 号、下大久保新田４―１・２号が、開口度が 30％前半未満で開口部が狭いが、それを除いた例は 40％後半から一辺開口までで、相当大きく開口している。

周溝持竪穴建物跡　北陸（第６図）

第６図には、岡本氏の集成をもとに、北陸地方



第９図　北陸地方周溝持建物跡の開口度合

第４表　北陸地方の周溝持建物跡

遺跡名	遺構	平面形	開口部数	区画内	開口部	開口度	ランク
下老子笹川	1	Ⅲ	全周	11.5		0	B
下老子笹川	2	Ⅲ	全周	10.3		0	B
下老子笹川	4	Ⅲ	全周	10.3		0	B
下老子笹川	3	Ⅲ	全周	13.5		0	A
万行赤岩山	2	Ⅲ	不明	15			A
横江古屋敷	2	Ⅲ	１か	12.2			A
漆チュウデン	1	Ⅲ	不明	15.3			A
漆町	8	Ⅲ	多	15	4	26.6	A
長池ニシタンボ	01a	Ⅲ	２か	15.3	2.1	13.7	A
八里向山Ａ	2	Ⅲ	2	15	13	86.6	A
高堂	２B- 1	Ⅲ	１－中央	15.3	2.1	13.7	A
道端	1	Ⅲ	多	13	6	46.15	A
西川内南	1	Ⅲ	1	9.5	1	10.52	B
西川内南	2	Ⅲ	全周	11		0	B
中内谷	254	Ⅰ	１－隅	10	1.1	11	B
新保本町西	1	Ⅲ	１－中央	10.2	3.2	31.37	B
新保本町西	2	Ⅰ	１－中央	9	1.8	20	B
新保本町東	4	Ⅲ	１辺開口	20.6	15.5	75.24	A
八幡	1	Ⅲ	不明	12.8			A
旭小学校	39	Ⅰ	１－中央	12	1.6	13.3	A
上荒屋	53	Ⅲ	不明	10.2			B
浜竹松	Ｂ－16	Ⅰ	１－中央	9.5	0.6	6.3	B
二口かみあれた	9	Ⅰ	１－隅	10	4.5	45	B
上荒屋	5	Ⅰ	１－中央	9	1.5	16.6	B

第５表　東海地方の周溝持建物跡

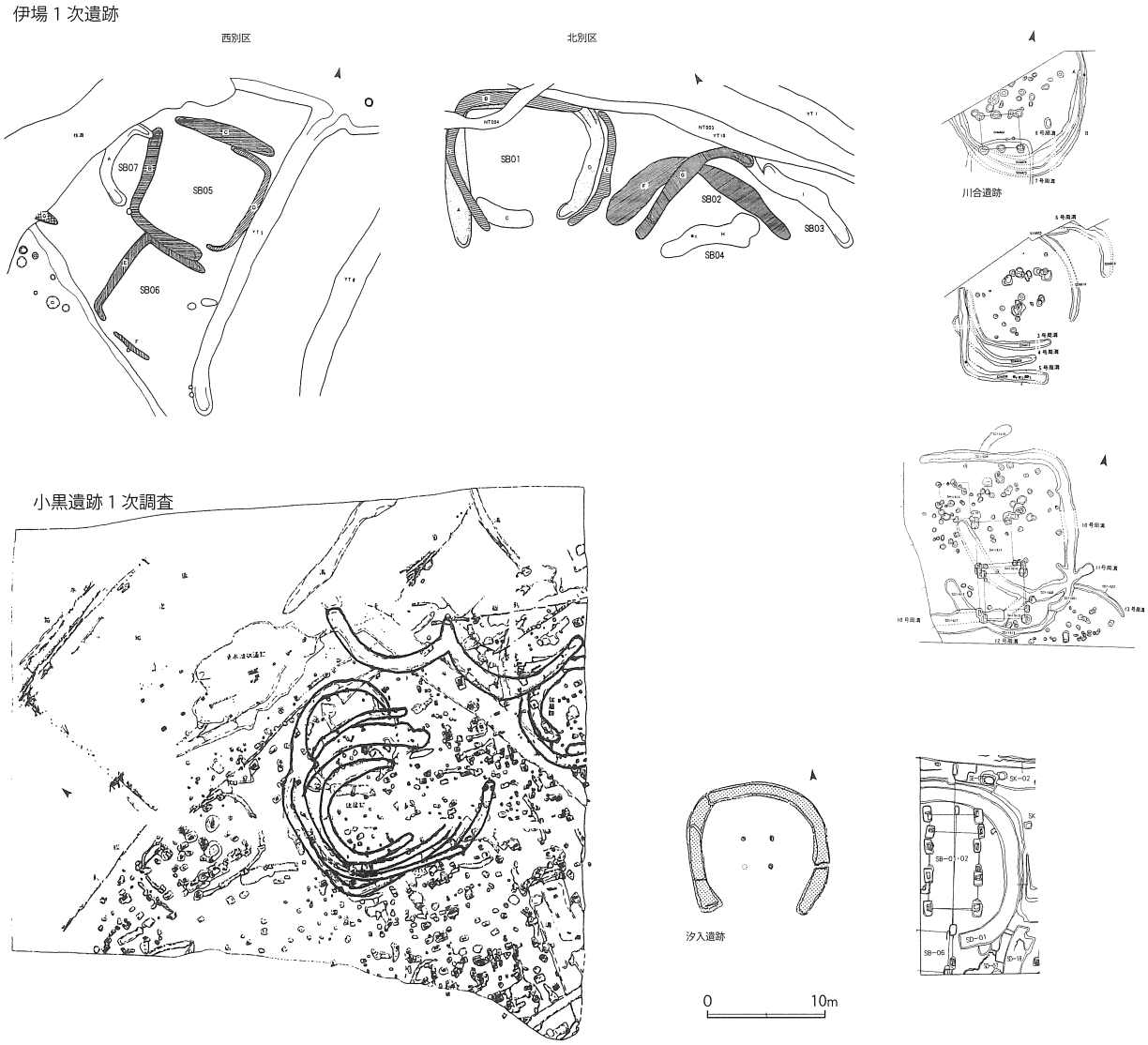
遺跡名	遺構	平面形	開口部数	区画内	開口部	開口度	ランク
伊場	SB01		１－中央	12.6			A
	SB05		3	8.1			C
	SB06		１辺開口	7.9			C
汐入			１－中央	9.6	5.9	61.5	B
小黒			１辺開口	6.4		100	C
			１－中央	11.0	7.5	68.1	B
川合	３号		１－隅	8.3	2.4	29	C
上ノ平	SB07	Ⅲ	全周	8.4	0		C
	SB12	Ⅰ	１－中央か	(10.0)	不明		B
	SB15A～C	Ⅲ	1	10.1	不明		B
	SB15D	Ⅲ	１－隅	13.9	4.6	33.1	A
	SB16	Ⅲ	全周	10.0	0		B
	SB18	Ⅲ	１辺開口	10.0	7.5	75	B
	SB23	Ⅰ	１－中央	8.4	1.8	21.4	C
	SB26	Ⅲ	１－隅	11.0	2.1	19.1	B
	SB27	Ⅲ	１－隅	13.0	5.3	40.7	A
	SB28	Ⅲ	全周	10.5			B
	SB37	Ⅲ	全周	12.5			A
	SB39	Ⅰ	１辺開口	10.5	9.3	88.6	B
	SB40	Ⅰ	１辺開口	9.6	8	83.3	B
	SB42A	Ⅰ	１辺開口か	(10.0)	不明		B
	SB42B	Ⅰ	１辺開口か	(10.0)	不明		B
	SB49A	Ⅰ	１辺開口	12.0	8.2	68.3	A
	SB49B	Ⅰ	１辺開口	12.0	8.2	68.3	A
	SB50A	Ⅰ	１－中央	16.5	9.3	56.4	A
	SB50B	Ⅰ	１－中央	16.5	9.3	56.4	A
	SB51	Ⅲ	１－中央	14.5	7.8	53.8	A
	SB52	Ⅲ	１辺開口か	8.8	不明		C
	SB54A	Ⅰ	１辺開口か	(13.0)	8	61.5	A
	SB56	Ⅰ	１－中央	9.0	5.4	60	B
	SB61	不明	不明	不明	不明		
	SB69	Ⅲ	１辺開口	9.2	9.2	100	B
	SB70	Ⅲ	１－隅か	10.6	2.6	24.5	B
	SB82	Ⅰ	１－中央か	9.9	不明		B
	SB87A	Ⅰか	不明	不明	不明		
	SB87B	Ⅰか	不明	不明	不明		
	SB89	Ⅲ	全周	10.3	無		B
	SB90	Ⅰ	不明	(9.0)	不明		B
	SB101	Ⅰ	１－中央	12.0	5.1	42.5	A
	SB110A	Ⅰ	１－隅	8.6	4.9	57	C
	SB110B	Ⅰ	１－隅	10.4	4.3	41.3	B
	SB113A	Ⅰ	不明	(8.4)	不明		C
	SB113B	Ⅰ	不明	(8.4)	不明		C
	SB126	Ⅰか	不明	不明	不明		
	SB163	Ⅰか	不明	不明	不明		
	SB164	Ⅰか	不明	不明	不明		
	SB165	Ⅰか	8.08	(7.2)	不明		C
	SD80	Ⅰ	2	7.6	1.3	17.1	C
	SD97	Ⅲか	不明	不明	不明		
	SD99	Ⅰか	不明	不明	不明		

の周溝持竪穴建物跡を掲出した。なお、遺構の呼称は岡本氏の略号によって記載する。

平面形　周溝の平面形は基本的に円形（Ⅲ類）である。中内谷 254（高柳ほか 2013）、新保本町西２（楠 1992）、旭小学校 39（木田 1990）、浜竹松Ｂ 16（前田 1993）、二口かみあれた９（上野 1995）、上荒屋５（出越 1995）の６基が隅丸方形（Ⅰ）だが、隅丸方形と即断できるのは中内谷 254、二口かみあれた９の２例ほどで、その他のほとんどに丸みが強い円形基調への志向性が見られる。周溝は凹凸が著しく、不整形である。

周溝の広狭　周溝の広狭については、「広溝」タイプ、「狭溝」タイプの双方が相半ばしている。広溝タイプは下老子笹川 SJ １、高堂第２Ｂ―１（栃木 1990）をはじめとする 15 例、「狭溝」タイプは万行赤岩山２号住居跡（土肥 1983）、新保本町東４（南 1991）などの８例である。

開口部　開口部については一辺中央開口型（①）８例、全周型（⑤）６例、一隅切れ型（②）２例、一辺開口型（③）が２例、多数が２例、不明が４例である。八里向山Ａ２例（下濱 2004）は特異で、一辺の中央が突出部状に開口し、その逆側が大き

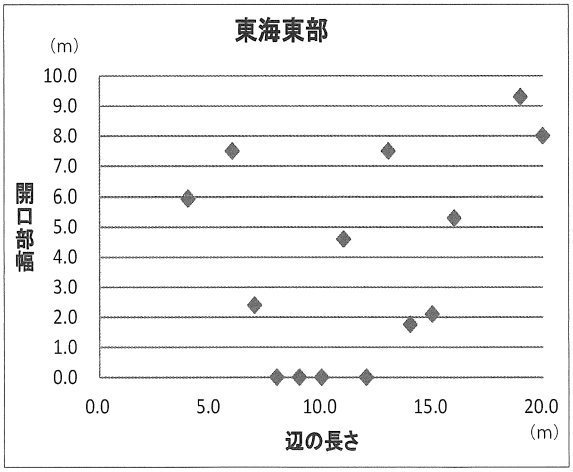


第 10 図　東海地方の周溝持建物跡（鈴木 2006・松井 2006・報告書より改図転載）

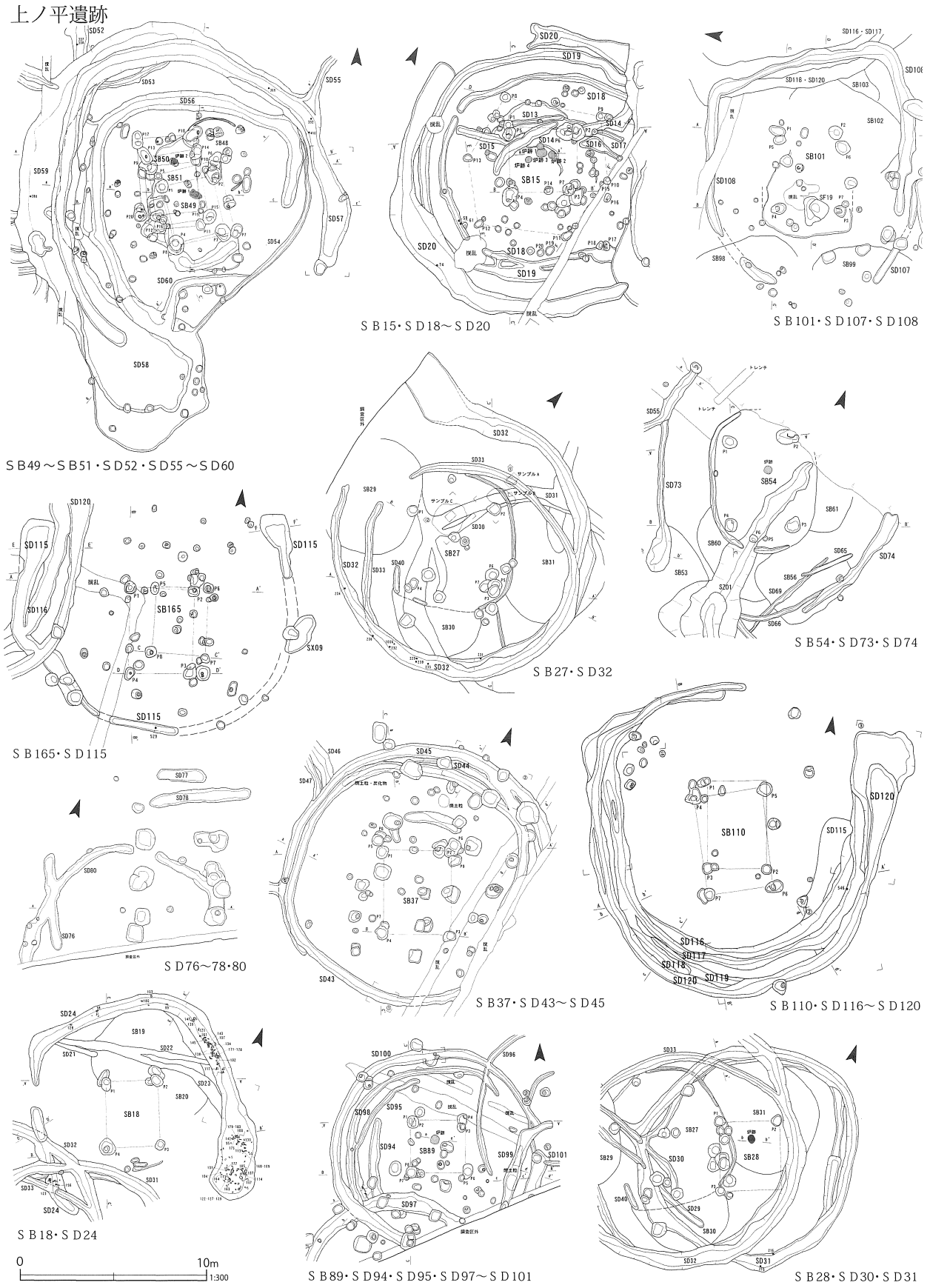
く開いている。道端１は一辺中央開口型だが、実際には途切れ途切れである。

一辺中央開口型と全周型で 14 例、全体の６割に上り、基本的な平面形であることが分かる。その他のタイプは、少数例として割合を分け合っている。

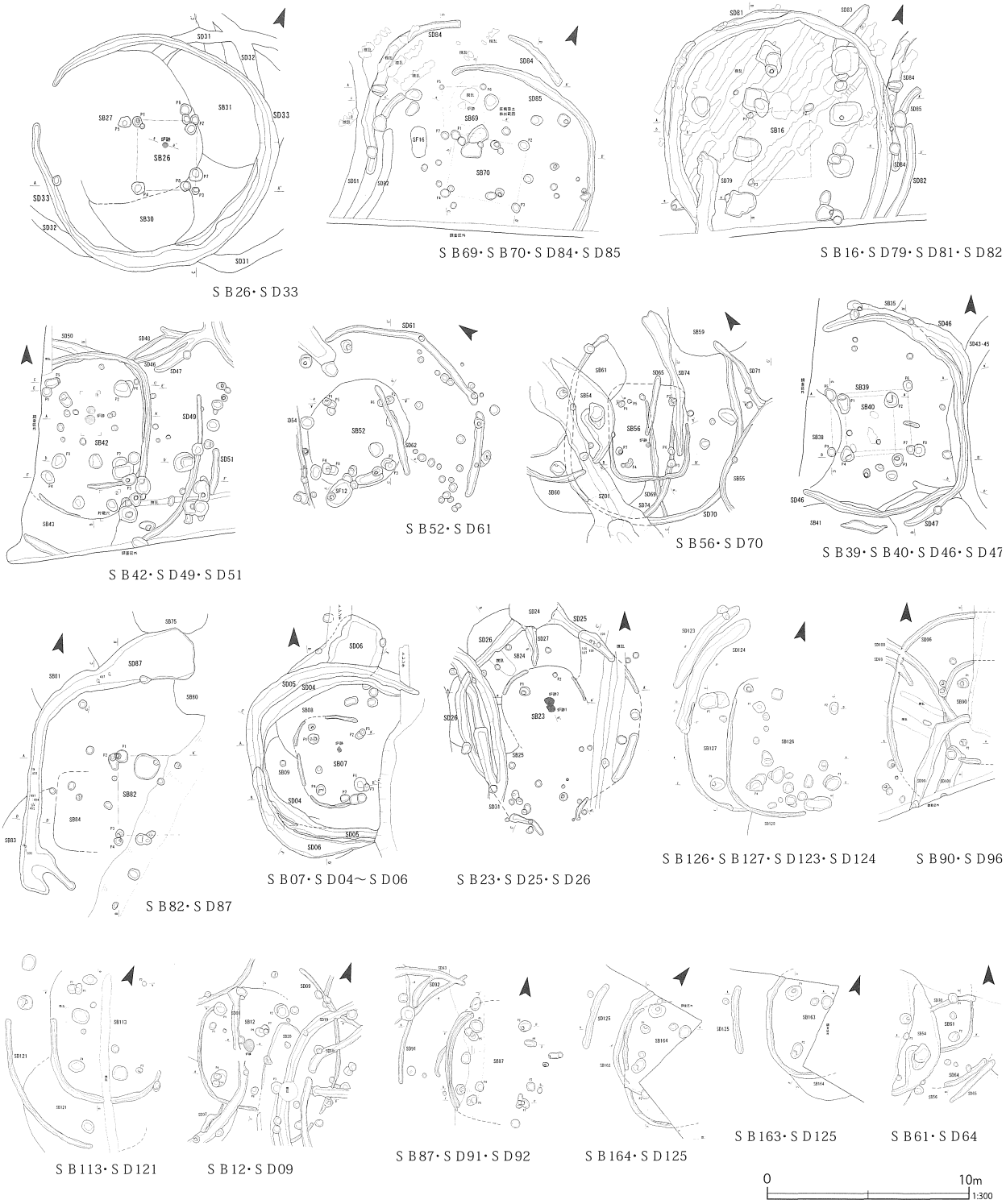
本稿で問題とする開口度合については、横江古屋敷Ａ区SI02（高橋 1993）、八里向山Ａ遺跡Ａ２、道端１、新保本町東４、二口かみあれた９の５例が、開口度が 40％後半を越えており、相当大きく開口している。一方、全周の下老子笹川１～４、西川内南２（伊藤ほか 2005）の５例とともに



第 11 図　東海地方周溝持建物跡の開口度合



第12図　上ノ平遺跡の周溝持建物跡（1）（報告書より改図転載）



第13図　上ノ平遺跡の周溝持建物跡（２）（報告書より改図転載）

に、西川内南２、漆町８（樫田 1987）、長池ニシタンボ 01a（吉田 1998）、高堂２Ｂ―１、西川内南１、中内谷 254、新保本町西１・２、旭小学校 39、浜竹松Ｂ―16、上荒屋５の 11 例は、35％以下で開口部が狭い。開口部の様相が不明な例を除く 20 例中 16 例は開口度合が小さい。グラフでも開口度合が下に分布し、相対的に狭い例が多いのが分かる。

周溝持竪穴建物跡　東海（第８図）

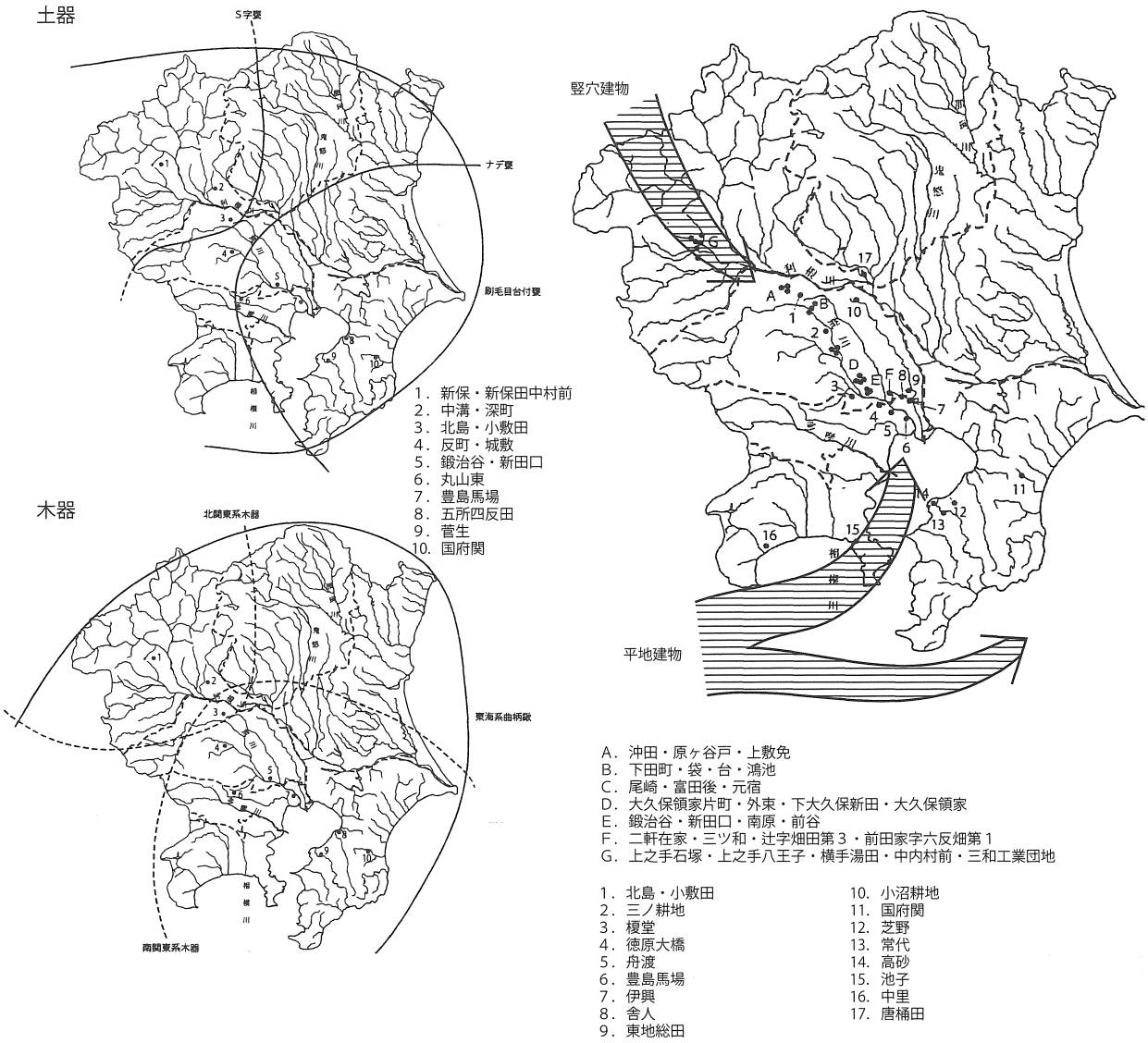
第８図には東海地方の周溝持竪穴建物跡を掲出

した。本稿で対象とする弥生時代終末から古墳時代初頭の例はごく限られており、具体的な様相が明らかな例は西遠江では浜松市伊場遺跡、中・東遠江では掛川市上ノ平遺跡（田村ほか 2008）、駿河では汐入遺跡、小黒遺跡、川合遺跡が知られるのみである。中でも、原野谷川上流の上ノ平遺跡は唯一低地に立地しない例だが、44 軒もの周溝持建物が検出されており、注目される（第 10・12・13 図）。

平面形　周溝の平面形は、隅丸方形（Ⅰ型）が大部分で 32 例、次いで円形（Ⅲ類）15 例である。隅丸方形のものでも円形に近いものが多く、上ノ平遺跡の様相から内部の竪穴建物、平地建物も同様の形態と考えられる。周溝の凹凸は 14 例で、北陸ほどではないが、凹凸が著しい。

周溝の広狭　周溝の広狭については、「広溝」タイプ、「狭溝」タイプの双方が相半ばしている。広溝タイプは伊場、汐入、小黒、川合、上ノ平の各遺跡で 23 例認められる。一方「狭溝」タイプは上ノ平遺跡の 26 例に現状では限られている。

開口部　開口部については一辺中央開口（①）型 11 例、全周（⑤）型 5 例、一隅切れ（②）7 例、一辺開口型（③）が 13 例、多数が 2 例、不明が 12 例である。上ノ平 SB50・51 は SB49 同様に、



第 14 図　関東地方における外来系文物の分布

基本的には一辺開口型だが、ごく細いSD62によって開口部が区画されているため、一辺中央開口型とした。

一辺中央開口型、一辺開口型で24例、全体の半数に上り、基本的な平面形であることが分かる。一隅切れ、全周型はこれらに次いで多い。開口部が2箇所以上に上る例はごく少ない。

本稿で問題とする開口度合については、川合3号、上ノ平SB15 D・23・26・70・SD80の6例で開口度合が35％以下と低く、汐入、小黒、上ノ平SB18・27・49 A・49 B・50 A・50 B・51・54 A・56・69・101・110 A・110 Bの18例が、開口度が40％後半を越え相当大きく開口している。グラフでも開口度合が高い分布傾向が見られる。

（2）周溝持建物の系譜

まず、施設のない周溝持建物跡にはどのような建物が建てられていたかについて、開口部の様相をもとに検討する。

ここまで掲出した諸例は、開口部の広狭が大きく二分される。広い例は周溝持平地建物、狭い例は周溝持竪穴建物である。既に周溝の形態や周溝幅の広狭によって建物の種類と地域の対応については言及したが、同様の対応関係が開口部の広狭でも認められるわけである。周溝の掘削に当たっては前述の三要因によって形態が決まると考えられるが、建物の種類と系譜が密接な関係があることが改めて確認された。

従って、施設のない周溝持建物跡の内、開口部の広い例は平地建物、狭い例は竪穴建物が建てられていたと考えられる。

施設のない周溝持建物についての以上の推定を前提に、これまでの様相を概括すると、第6表のようにまとめられる。非常に大掴みであるが、関東地方の周溝持竪穴建物は北陸地方の周溝持建物と共通点が多く、関東地方の周溝持掘立柱建物、施設が検出されていない周溝持建物は、東海地方の周溝持建物との共通点が多い。

第6表　各地の周溝持建物跡対応表

地域	平面形	開口部数	開口度合	狭広	凹凸
関東竪穴	円形	中央開口	狭い	狭広半ば	あり
北陸周溝	円形	中央開口・全周	狭い	狭広半ば	あり
関東掘立	隅丸方形	中央開口	広い	広い	無し
関東周溝	隅丸方形	中央開口	広い	広い／広狭	有無
東海周溝	隅丸方形	中央開口・一辺開口	広い	広い／広狭	有無

関東地方の周溝持建物の掘り込みの深い竪穴建物に関しては北陸地方の、掘立柱建物、痕跡のない平地式建物については東海地方からの系譜関係を考えて差し支えないと考えられる。

一方、再度周溝持平地式建物、周溝持竪穴建物の分布に立ち返ると、第12図に示したように、地理的な傾斜関係にあるのが分かる。冒頭に述べたように、前者は荒川低地、東京低地を中心とし、後者は群馬県域を中心とする。ただし、平地建物と竪穴建物は排他的な関係にはない。例えば静岡県浜松市の大平遺跡との関係が推定されている群馬県の三和工業団地遺跡例（飯島2004）、鍛冶谷・新田口遺跡、川口市三ツ和遺跡のように両者が混在、併存する遺跡は、再三述べたが単に両者が系譜関係のみに収斂する建物ではないことを物語っている。

3．開口部の形態と機能

本稿では、開口部の広狭を検討の大きな柱としてきた。ここまで述べてきたように、系譜関係を示すほどに、分布や他の要素との組み合わせが異なる様相を見せており、単なる形態差に留まらないとも考えられる。本項ではこの形態差を機能の差として検討を試みる。

開口部の形態は丸く収められている場合がほとんどだが、少数ながら突出部などの様相を異にする例が見られる。①開口部の片側が突出する（上之手八王子176）、②開口部に細い溝が掘り込まれている（横手油田B 1）、③直線的な開口部（鍛冶谷・新田口18号、舎人J 5 G―4・5、

豊島馬場SH03・04・05・34・37・63・64・105・127・129・130・131・137・158である。前谷1号はその上で片側が突出している。

それ以外にも斜めに直線的な施設が取り付く小敷田15号、バチ型に斜めに開く豊島馬場SH07、内側に溝が付く豊島馬場SH35、突出部が2箇所設けられている小敷田4号などがある。

このような開口部の形態は、建物本体に取り付く施設の存在を示す。こうした例は、いずれも開口部が広く開いており、空間的にも施設を取り付けるには充分である。

開口部の施設として第一に考えられるのは、入口である。一般的に竪穴建物、平地建物双方とも扉の場合はほとんどなく、竹・葦・草を編んだ編垂蔀、板による板蔀が使用されていたと考えられている。こうした施設そのものの出土例は現在のところ認められていないが、関東地方では入口部と考えられる箇所に突出部やピットが認められる場合があり、跳ね上げ式の蔀の支柱と考えられている。突出部は住居跡の大きさにかかわらず幅が一定しており、入口の規模はほぼ同一と考えられる。

周溝が全周する場合や開口部がごく狭い場合は、入口部と開口部が対応すると考えられる。

逆に一辺開口のような溝を掘削しないという方法は、溝の外側と連続して空間を使用する志向の現われと言えるだろう。いずれの入口の大きさにも差異がないならば、それ以上に広い開口部にはどんな施設が設置されているのであろうか。

ここで注目されるのは豊島馬場SH10・11（第4図）である。この例ではSH10の開口部にSH11が取り付いている。つまり建物本体に付属する施設が存在するのである。前述の小敷田4・15号の突出部も同様に施設の存在を示すと考えられる。

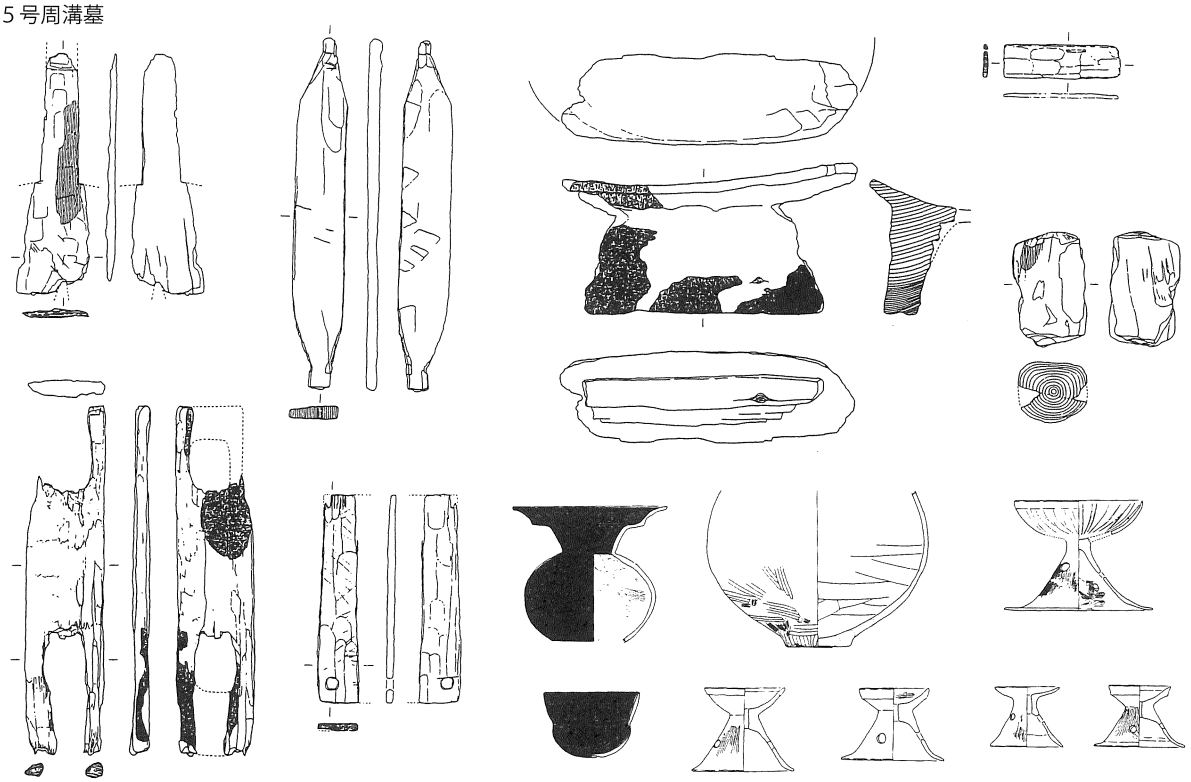
こうした建物本体に施設が付設される例は、縄文時代の柄鏡型住居が良く知られており、アイヌのチセなどではセムと呼ばれる納屋を兼ねた入り口や風雨をしのぐ前室が突出部として建物の前に付設されている（註2）。同様の施設の存在が、可能性としては充分考えられよう。

もちろん、異なる年代の例や、遠隔地の例がそのまま適用できるわけではないが、豊島馬場や小敷田などの前述の一連の例はそうした付属施設の存在の可能性が高いといえないだろうか。また、その他の一辺開口型や中央開口型の中でも開口度合の大きな例、石守のいう馬蹄型、開口型の例にも同様にそうした施設が設けられている可能性が考えられるのではないだろうか。

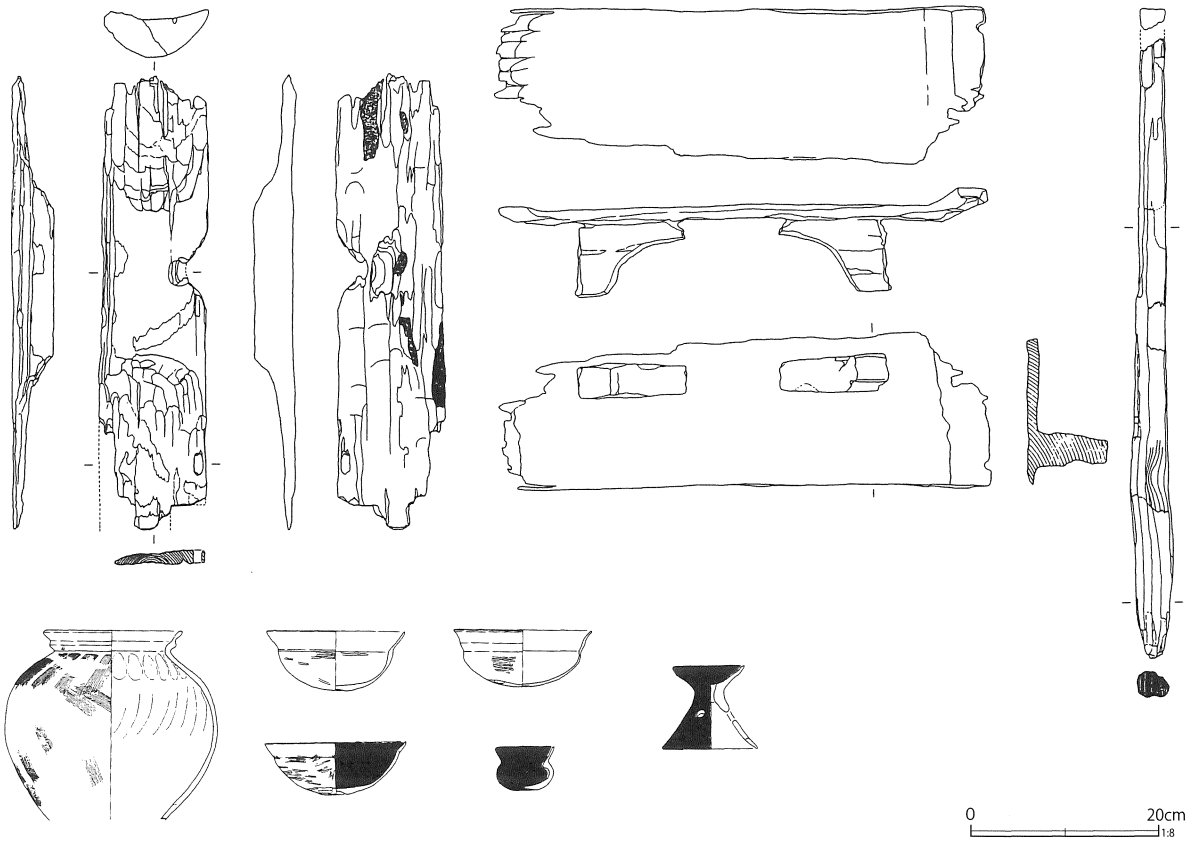
仮定を重ねる形にはなるが、馬蹄型の周溝持建物は施設が付属した建物、周溝持前室付建物であり、逆に全周型、石守の囲繞型の周溝持建物は建物本体のみであるとするならば、両者の用途が異なる可能性は充分に考えられよう。まず、囲繞型の建物が住居であることには異論はないであろう。問題は前者の施設が付属した建物である。前述のように、荒川低地を中心とする周溝持建物跡は、登呂遺跡のような竪穴住居跡と同様の構造の伏屋式平地式建物を推定しているが、登呂遺跡の周溝持建物の周溝は囲繞型である。馬蹄型や開口型の周溝持建物に、ここまで論を進めてきた前室的な施設が存在するのであれば、どちらが相応しいのか判断しかねるが、伏屋式、壁立式、双方の可能性が考えられよう。

それに前室が付属する建物は、居住のみではない何らかの器材を格納する機能があったと推定される。開口部そのものからではないが、具体的に格納されていた可能性がある用具類が周溝から出土している例がある（第13～15図）。小敷田遺跡4区5～10号周溝墓からは、籾付の炭化米、又鋤、着柄鋤、又鍬、エブリ、大足、田下駄、横槌、容器、弓、板、棒材、杭、部材、木錘、舟形木製品などの木器が出土している。豊島馬場遺跡SH20からは炭化材、SH27からは板材、SH37

第５号周溝墓

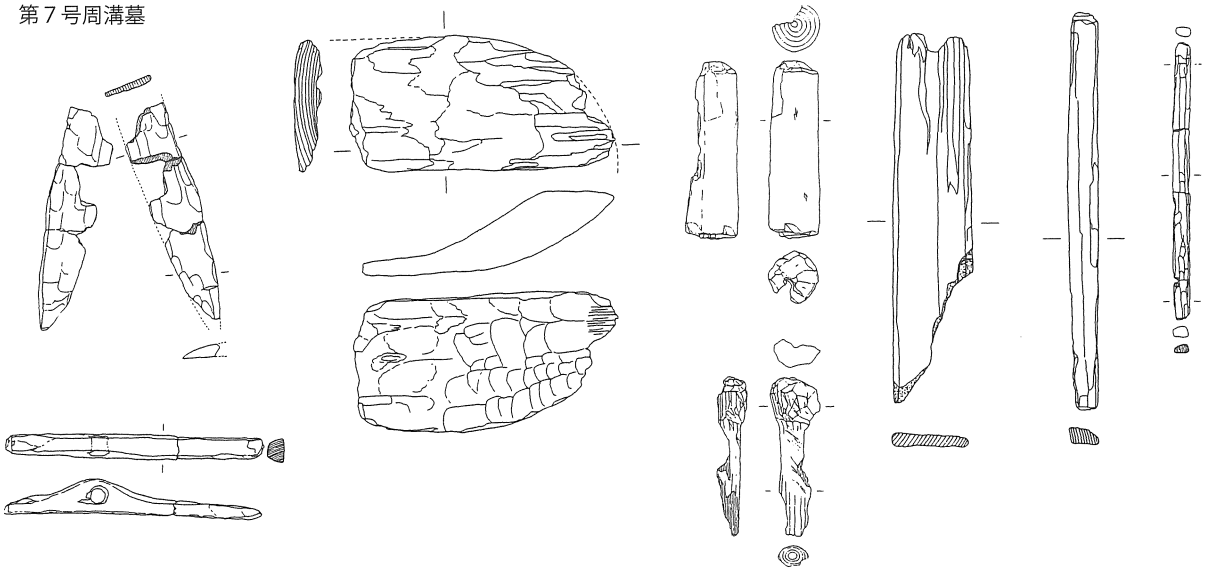


第６号周溝墓

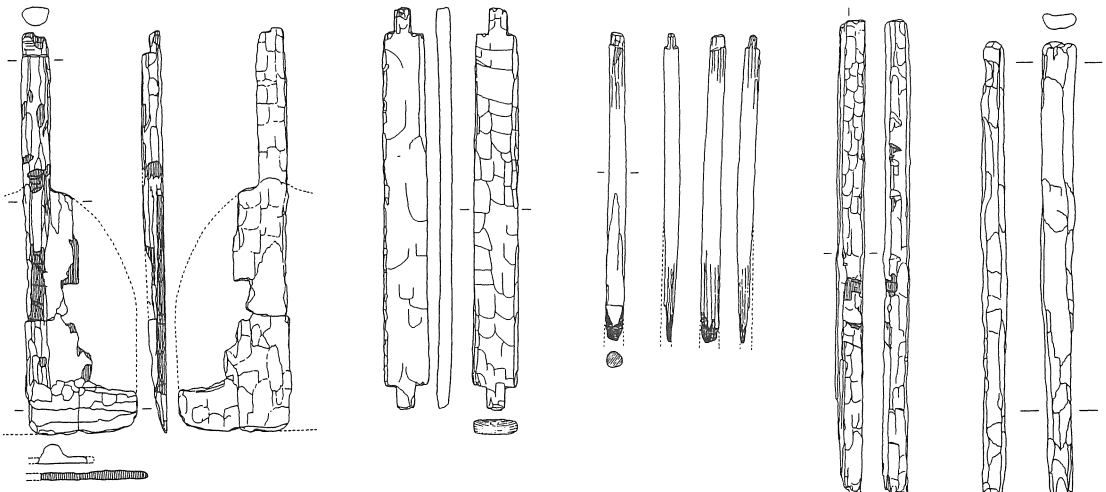


第 15 図　小敷田遺跡「周溝墓」出土遺物（1）

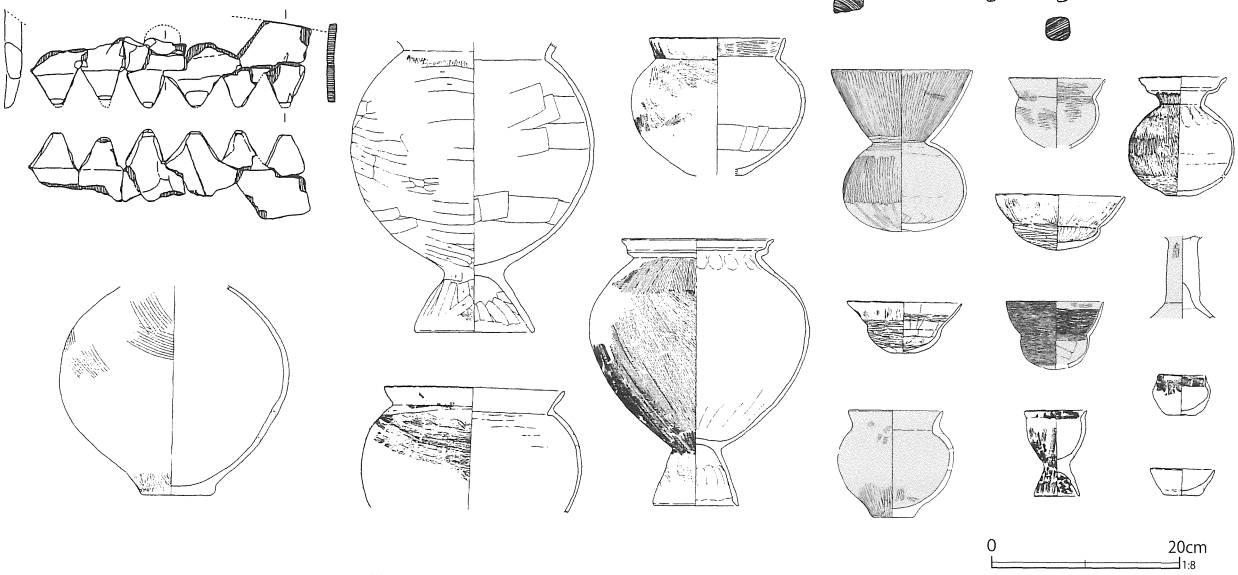
第７号周溝墓



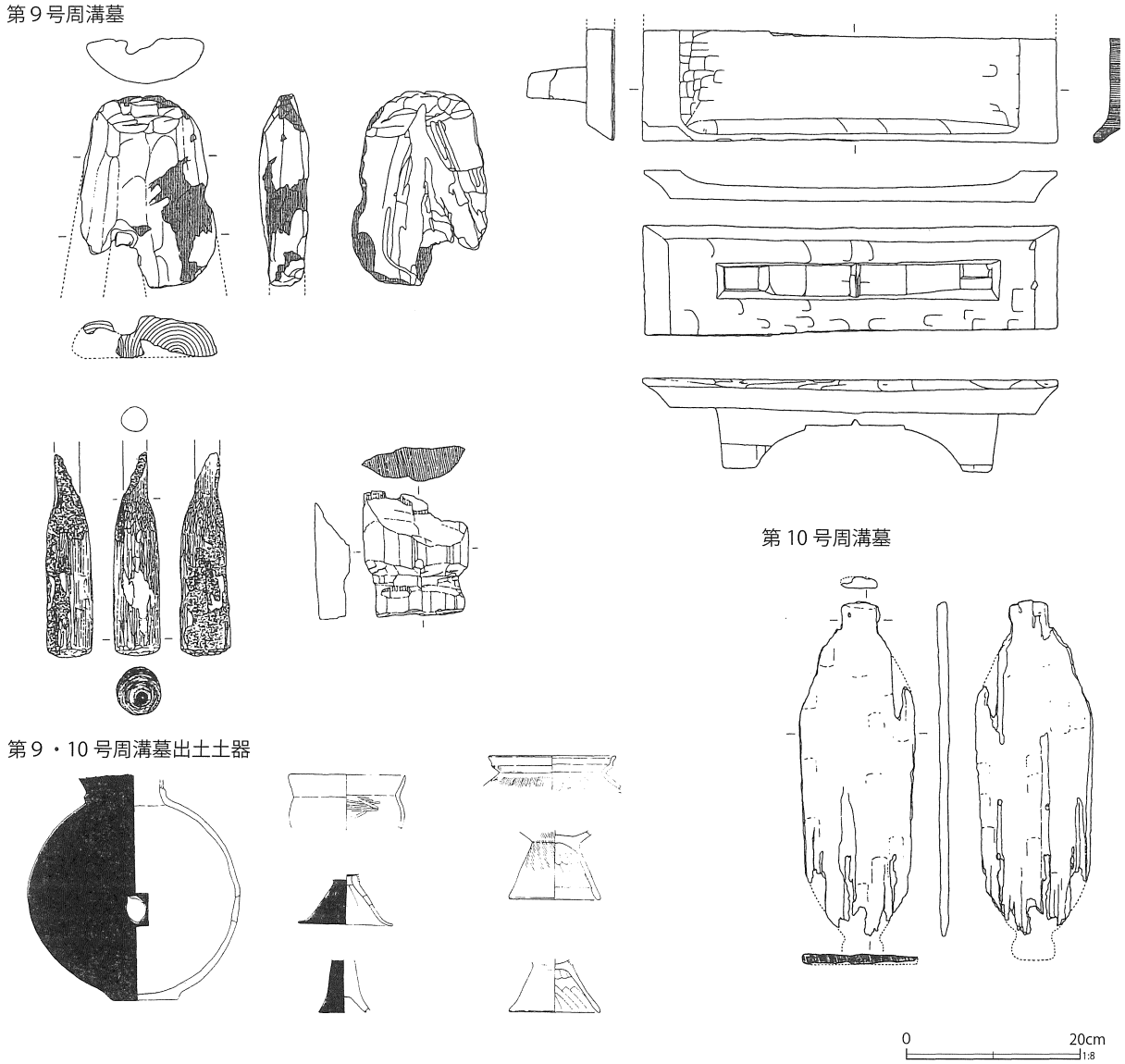
第８号周溝墓



第７・８号周溝墓出土土器



第 16 図　小敷田遺跡「周溝墓」出土遺物（２）



第 17 図　小敷田遺跡「周溝墓」出土遺物（３）

からは加工材、SH48 からは膝柄又鍬、SH124 からは多又鍬、横槌、工具柄、欄干状の部材、板材が出土している。このほかに鍛冶谷・新田口遺跡、舟渡遺跡などでも炭化材が出土している。この内、建築部材については建物の構造材と考えるのが最も妥当であろう。それ以外のコメ、農具、容器、弓、工具などは建物に格納されていたと考えられる。ただし炭化米は小敷田４区７号のみであり、一般的ではない可能性もある。

別に述べたように、周溝持建物の集落は低地開発と密接に関係すると推定される。そこでは多くの土木具や運搬具が必要であったと考えられる。周溝持建物の前室には、こうした用具類が収納されていた可能性を現時点では考えておきたい。

以上のように、周溝持平地建物には、通常の竪穴建物的な伏屋式建物とは別に前室付建物が存在していたと推定される。その場合、これまで挙げてきた竪穴建物、伏屋式平地建物、壁立式平地建物、掘立柱建物に更に前室が付く場合を考慮に入れなければならず、更に複雑な展開が予想される。だが逆に、複数の系譜、多種類の建物といった、この複雑なあり方こそ、他の外来系文物同様に、関東地方の特徴と言い得るのではないだろうか。

小結

以上、周溝持建物の系譜について、周溝の平面形態、開口部の様相にもとづいて推論した。再度掲出すると、関東地方の周溝持建物の掘立柱建物、施設の痕跡のない平地式建物は東海地方、掘り込みの深い竪穴建物は北陸地方に系譜関係を持つと考えられる。

また、開口度合の大きい周溝持建物には、前室が存在する可能性が考えられる。その場合には、全く異なる建物構造も考慮しなければならない。今後の大きな課題と言えよう。

冒頭から述べているように、周溝持平地式建物、周溝持竪穴建物の分布は、地理的な傾斜関係が認められる。前者は荒川低地、東京低地を中心とし、後者は群馬県域を中心とする。ただし、平地建物と竪穴建物は排他的な関係にはない。再三述べるが、単に両者を系譜関係のみによって整理するだけでは不充分である。

問題は単純ではなく、他の外来系文物同様に関東地方に至った後に両方の系譜は交錯し、独自の変容を遂げていく。まさしく関東的な外来系建物になるのである。建物構造が異なれば更に問題は複雑になる。その複雑さこそが関東地方の特徴的なあり方なのかもしれない。

かつて、土器ではナデ甕やS字甕、木器では北関東系木器、南関東系木器が、それぞれ刷毛目台付甕、東海系曲柄鍬の大きな共通分布域の中で、地理的傾斜をもって分布していることを示した（福田 2012）。同様の関係性が周溝持建物についても窺える。

他の外来系文物との関係性を検討するためには、本稿では形態の差異に焦点を当てるため、あえて言及しなかった時期的な推移、展開、消長が重要であるのは言うまでもない。

次稿では、本稿で明らかになった系譜関係を意識しながら、その展開について整理したい。

また、大規模な周溝持建物の集落である埼玉県川島町富田後遺跡（鈴木 2011）、静岡県静岡市登呂遺跡（岡村 2005）、汐入遺跡の資料については充分に咀嚼できず、本稿にその成果を生かせなかった。次稿での課題としたい。

なお、本稿は拙著（福田 2014）の第６章の補遺として草したものである。次稿と合わせて併読をお願いしたい。

謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方々に御教示いただいた。御芳名を記し、感謝申し上げる。
飯島義男、岡内三眞、岡村　渉、及川良彦、
菊池徹夫、鈴木孝之、高橋龍三郎、田村隆太郎、
中島広顕、松井一明、吉田　稔

註１　平面形、開口部数、周溝の連続性、全体の規模については、これまで用いてきた以下の分類を用いる。

平面形　Ⅰ：隅丸方形、Ⅱ：方形、：円形、Ⅳ：それ以外

規　模　A：12.0 m以上、B：9.0 ～ 12.0 m未満を、C：6.0 ～ 9.0 m未満、D：6.0 m未満。

開口部　①：一辺の中央が開口する、②：隅の一つが開口する、③：三辺のみ、一辺開口、④：L型、⑤：全周

周溝の連続性　a：開口部以外に周溝が途切れない、b：複数の開口部や途切れ途切れ

開口度合については、開口部のある辺の周溝コーナー内側の下端間の距離に対する開口部の下端間の距離を用いる。これは、筆者がこれまで用いてきた規模の計測値同様に、確認面の掘削によって左右されない数値であるためである。

註２　アイヌの建物構造については菊池徹夫氏に御教示いただいた。

引用・参考文献

飯島義雄　2004 「所謂「三和工団地Ⅰ遺跡型」の「周溝をもつ建物」の構造」『研究紀要』22 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

石守　晃　2003 『中内村前遺跡（2）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第 322 集

伊藤正志他　2005 『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 146 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

上野　敬・北野博司他　1995 『二口かみあれた遺跡』 志雄町教育委員会

岡村　渉　2005 『特別史跡　登呂遺跡　再発掘調査報告書（考古学調査編）』静岡市教育委員会

樫田　誠　1987 『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』小松市教育委員会

木田　清　1990 『松任市旭小学校遺跡』松任市教育委員会

楠　正勝　1992 『金沢市新保本町西遺跡Ⅲ』金沢市文化財紀要 97　金沢市教育委員会

坂口　一他　1999 『三和工業団地Ⅰ遺跡（2）―縄文・古墳・奈良・平安時代他編―』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 251 集

嶋村一志他　1999 『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第 25 集　東京都北区教育委員会

下濱貴子他　2004 『八里向山遺跡群』 小松市教育委員会

鈴木孝之　2011 『富田後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 385 集

高橋由知　1993 『松任市横江古屋敷遺跡Ⅰ』 松任市教育委員会

田村隆太郎　2008 『上ノ平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 187 集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

出越茂和　1995 「①平地式・竪穴式建物」『石川県金沢市　上荒屋遺跡Ⅰ　第２分冊　古墳時代編』金沢市文化財紀要 120―１　金沢市教育委員会

出越茂和他　1995 『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ　第２分冊古墳時代編』金沢市文化財紀要 120―２　金沢市教育委員会

栃木英道他　1990 『小松市高堂遺跡　一般国道８号改築事業（金沢西バイパス）関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター

土肥富士夫他　1983 『万行赤岩山遺跡―宅地開発に係る緊急発掘調査報告書―』 七尾市教育委員会

長瀬　出　2000 「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学』第 26 集 pp.1-26　法政考古学会

西口正純他　1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第 62 集

福田　聖　2009 「関東地方における「周溝」の研究をめぐって」『古代』第 122 号 pp.18-26　早稲田大学考古学会

福田　聖　2011 「関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡」『研究紀要』第 25 号 pp.139-158 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田　聖　2013 「関東地方における周溝持建物の様相」『埼玉考古』第 48 号 pp.29-40　埼玉考古学会

福田　聖　2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』私家版

前田清彦　1993 『松任市浜竹松Ｂ（竹松北）遺跡』松任市教育委員会

松井一明　2002 「竪穴住居と掘立柱建物」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会

南　久和　1991 『金沢市新保本町東遺跡』金沢市文化財紀要 85　金沢市教育委員会他

宮本長二郎　1986 『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版

吉田　淳　1998 『長池・二日市・御経塚遺跡群』 野々市町教育委員会

吉田　稔他　1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集

研究紀要　第30号
—設立35周年記念—
2016
平成28年3月14日　印刷
平成28年3月18日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台4丁目4番地1
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955
印　刷　朝日印刷工業株式会社